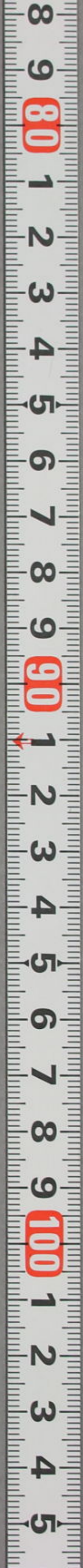




續羣書一覽

十一

1加  
765  
11





門 4 2  
號  
卷

雜書之部

續君年書一覽  
成



雜書之部

金玉積傳集

厚

二冊

中務卿兼明親王口傳

此編ハ入木道の傳抄子にして筆法の秘奥を述ぶ  
 書中子ハ木道トハ弘法大師大唐書龍寺子於て  
 一人の比丘尼之にふ子より厚さ五寸の木子書  
 せらるゝ子具文字徹て木子入しより以兼筆道  
 を以て入木道と云て載す又夜鷗鈔子云法性寺  
 殿の我等が曾祖父是信朝臣を召て御手を能く  
 あそはすと鬼食せる子や御手をあし比へられ



淡如の筆  
 書法之部



し子定信我手の徳を顕さんと思食せ玉朽木の  
折敷を召寄て其上に書北たり紙に物を書たる  
様子裏へ徹りたりければ其時被仰けるハ我等  
非処及と大子感じ被仰けるとかや自是手跡之  
功の入たるを申す入木の功と申傳へたりと記  
す兼文按するに比積傳集の説是亦る一ハ大師  
の御傳申すも粗此事に似たる事あり此書下卷  
ハ照陽殿八曲の次第を述べ蓋し後申書玉具平  
親玉筆道に八曲あり後人の附録せし物なり  
正嘉元年四月六日書写之早権中納言荻原花押

(第壹號)

一 鳥羽玉問答集

写

一冊

権大納言行成卿撰

此編入木道の心得書ふ北と就中彼名の沙汰復  
くまた奇の書様艶書の夏ふとさも載せられ北た  
り或ハ空函道風佐理卿等の筆の毛に事をも記  
す外書子見さる処あり又大師の口傳書といふ  
を引書す問答件に書子は非す

一 夜鶴書北鈔

写

一冊

正三位行能卿撰

此書ハ廿尊寺家書道になしして其先祖行成卿

古書保存會



之夏多々載せり北編中より判形と申事。平良  
持宇多院、御宇仁和元年、子將軍の宣旨を蒙り  
北し時判形と云事始りたりと記す  
兼文曰此説誤りふり天皇御座内家松平等之判  
形。既子天平以前よりあり花押之如きも聖徳太  
子之御自筆にありは此説の非ふる事論及し  
余弘法大師を始め判形の今日子傳ふるもの不  
少あり  
又云弘法大師の手跡を聖跡道風と聖跡天祥と  
賢跡と申是を三賢の聖跡とハ申竟總て禁内取

(第壹號)

扱ひ之書式を專りて記載せらるる巻後子鶴林玉  
露令集解海篇真録令義解天原亮徽等の跋筆下  
リ  
一 製筆考 写 一冊  
花山院右大臣家厚公撰  
享和三年癸亥八月子洲三宅公輔跋  
此編ハ弘法大師に説道風朝臣の説佐理卿に説  
行成卿の説等を弘法大師の執筆法烏羽玉司卷  
抄金玉積傳集 ~~辨説新纂~~ 抄法 ~~不抄~~ 哀直筆記 解麟  
抄筆札密傳抄等より製筆之考案を抄出し其制

古書傳存會



作と徴綱子記し卷痕子は晋王羲之の筆経中作  
筆之説と和解せり此たり

一本朝筆道初門階等要略 五册

友田心西乘因辨

寛文六年七月十七日黄檗獨立老衲序

同 二年八月友田友閑言及友叙

此書初睡庵彩雲初友閑之撰述七しを没後

其才子乘因之神編落成すり此なり友閑ハ板川

富田の人として滝本松花堂之鳥才筆道有名姿く

此書ハ大師の更流松花堂之説より其次力ハ

卷一 立教立志策進

兼應三年孟夏月念一日書武江旅舎以処獨立和

尚也

卷二 入學初門筆道總論

初教門十條 中教門五條 友教門七條 以上各目而

已右法帖手習三時階等説なり附録色紙形略説

卷三 初教門十條 詳説有之

卷四 中教門五條 詳説有之

卷五 友教門七條 詳説有之

一 松秀園書談

三册



雲舟増山河内守正賢著

寛政五年癸丑之仲春時賜漢字跋

編者正賢朝臣号長洲称勝彦筆道を趙陶舟仲頤

子學以文学の起原書法に流傳を詳しし初め

書法の沿革を和漢に満りて論し中よは執筆

之法及法書の論あり古法帳家の心得とふる事

不少に編ふり又我國硯石に評を載す卷末よは

歐陽詢の書法に注を如ふ

寛政五年三月上梓

一 天朝墨談

五冊

文禮館藏版

(第壹號)

五十嵐篤好 著

天保二年五月高田祐久政六年五月最上公成

兩跋

巻端に自序あり此書近世筆道に著述多けれ共

皆からふ升子ならへるより中よは我國の筆道

をめてし、にわたるもあ北と從同じ筋あり比け

ちめを清く分けていへる山のゆし故に此書は

尊田親王の御説より筆道も其根元ハ天地に

誠の道よりある事を論じ源氏物語なりといえ

る処を専ら引いて、文字ハ声をうつしたは也



の中え 楮紙の 同といふ 説古来人の云さる処を論  
しにたるもの也 芦手 水牛 哥繪 などいふもの、事  
紙墨筆のいとくわしくいへり

卷一 文字 和様唐様 我國の手跡 御流

古今筆跡 手習 手

卷二 手

卷三 いろは かね 芦手 御西 手本

ふ升

卷四 紙 草紙 筆

卷五 墨 硯 水滴 文鎮 机 書舩 雜

(第壹號)

事

撰者五十尚 小豊次 篤好ハ 越中の人 小して 御家  
流を 高田 祐久 子 学以 歌 季を 富士 谷 御 扶子 与 け  
編中よく 古書を引いて、其論は 勝北 たる あり  
り 安政六年九月上 梓

一 古額字集 写 二 卷

集者 知らず

嵯峨 空西 善光寺 月 山城 八幡宮 月 南都 真言寺 月

紀州 丹生 明神 月 大極 大小 月 大峯 山 月 一切 秘藏

月 山城 愛宕 山 道 風 即照 月 西天王 寺 月 松庵 日 山



城大原大明神	向日大明神	大小	飛龍	下
馬 <small>川</small> 清水寺	救謚大田禪師	日本	總鎮守	日照
門寺 <small>行成</small> 山城離宮	八幡	大山積	大明神	佐理
壽 <small>即之</small> 自是筆者	潮名長尾山龍	塔寺	才	六天
満宮魚心亭	上皇太子	觀	系掃	愁
雪雲水	光乘院	慈軒	雪	塔
月	延令院	最勝庵	雲	光山
老大明神	蓮通寺	八王子	蓮藏院	靜心院
寂照殿	以上			
一 文藝類纂				八冊

(第壹號)

柳原芳野著

明治十年十二月西村茂樹漢字叙

卷中畫圖ハ北代有卿將野良信之幕写すハ処也

字志 一 二 文志 三 四 学志 五 六 文具志 七 八 之 四 志

の中文具志ハ高木紹安の録すハ処此書の主意

唯文藝子止まるを以て古書編輯の事を畧也

卷一 字志上 字志總論 平假名及片假皮語

市假名及五十音 五十音図 諸體 五

十音韵 処生原始 日文及諸神字論 五

肥人薩人書及諸可疑古字 習字沿革



假名音總論 和字統論 點圖并倒

讀論 附點旁角筆字指等圖

卷二 字志下 假名字源附古人處書之諸體

元假名字、字源附古書心用之別體

卷三 文志上 文章沿革論 文章分體原始圖

月諸體古文 祝詞祭文宜命消息

後世女子消息文 假字消息總論 日

記死行文 漫筆文 物語文

卷四 文志下 漢文傳考 漢文子屬寸百諸體

古漢文 中古記事文 詔勅 排儀

文 官符下行文并上請文 注身書簡

文 日記記錄文 詩志

卷五 字志上 文學總論 歷史講義典故學 復

古學 儒學總論 明姓道字音紀傳道和音道

章 科試及牙試法叙法 所修六科進上明明法

精 大序沿革 生寢中修職 國學 私學 書

字 古人書跡諸體 畫學 古人畫圖諸體

字 志下 醫學 醫官 附 施藥院 醫學 則

卷六 字志下 醫學 醫官 附 施藥院 醫學 則



及科試及第 外科 鍼術 女医 耳

目口達科 按摩 藥物学 曆学 曆官

曆奏 諸曆沿革并图 漏刻学 漏刻諸

時辰儀 天文学 紙 紙論 造法概略 造紙

卷七

文具志上 紙 紙論 造法概略 造紙

植物図説 古紙考證 諸国産紙

卷八

筆 筆端 製造法 諸家用筆图

同下 硯 硯論 製造法 諸研各様图

採烟法 刻法并 因解 刷法图

解

書卷沿革 諸縫綴法 以上

明治十一年一月梓行之 文部省 藏版

一 江談抄 写 五册

中納言大江匡房卿撰

此編群書一覽に曰大江家の人々の詩文を論也

し談話ふり依り江談と号す兼文此書を関する

子江家ハ匡衡佐国維時の三卿也管氏は天

神之聖作管三岳等之作詩も数多有之又一覽の

説下は詩談を以て題号と為すよし未れと詩度



二冊にして外事三本、此は此説も信し難し  
或は才四の巻を二冊と爲し六冊とす、今もあ  
れと少しの異同中、唯冊数を分けし而已也

卷一 公事廿五条 撰家事七条

仙神変十五条

卷二 雜事四十七条

卷三 雜事七十四条 十一本 卷三十二条以下分爲

卷四 詩事百廿一条

卷五 詩事七十一條

一 穰懷集

序

三冊

(第壹號)

飯尾氏三善永祥著

享德甲戌十一月蘭雪并漢字序

撰者永祥、世々室所蒙聴詔之官吏也

此書ハ事物の名数を類聚し、以て幼子姪子教ふ

といふ部門は天象、風雨、仙事、神事、祈禱、寺院、諸家

四時年中行事、象色、地、歳、漢、穰、草木、五穀、乘物、燈、燭

金玉、京治、附行、旅、術、勢、草木、諸道、紙、家、屋、人、倫、送、書

官位、武職、樂、目錄、衣服、經、論、本、書、哥、道、遊、樂、飲、食、書

繪、等、之、三、十、二、門、と、爲、す、神、事、明、録、外、也、兼、文

按、す、る、子、此、編、燈、燭、部、に、云、鳳、兄、蔡、短、蔡、長、蔡、中、卷



蠟燭と記載す神沢氏が翁草子短檠ハ利休時代  
より有り古ハ皆燭臺子土器とのせ多りと記す  
其誤りを知るべし又蠟燭ハ文祿の比迄日本小  
不リ天正の比堺の町人納屋助左衛門と云者小  
琉球に渡り呂宋に至り文祿三年日本へ歸る時  
茶壺五十箇午燭燭各千挺秀吉公一献すと或書  
子見一たり此献る処之蠟燭を午本として元を  
割するととあれと是より遙以前享徳子既子あ  
りしを見るべく誤りもまた甚しきものふらず  
ヤ

一 醒睡笑

写

八冊

安樂庵葉傳著

卷端元和九年之假名自序あり

此本之旨趣は此本をみれば自ら睡を醒して笑  
ふるまゝ、子や醒睡笑と名付と云書中長  
公時代より徳川家初め比迄時子な北七の狂哥  
をまゝのせ又ははなしのみしかまゝ先比編を以  
て落話の矯矢とすべし題は名津希親方 實人  
行跡 艇 若太郎 賢達翁 謂被謂物之由来  
落書 ふいとのる 鈍副子 世智の僧説通

古書保正會



万山、は物、文字無顔、不文字、文の、不、  
 自墮落、清僧、面一多批判、い、又は批判、曾  
 て邦、い合、矣、唯有、嫉心、上戸、人、ハ、是、たら  
 兎、の、導、谷道不知、意、の、道、恰、気、詮、ね、い  
 秋、空、推、ハ、ち、か、ふ、た、う、そ、の、き、思、の、色、を、外  
 子、い、ふ、い、い、様、ハ、な、ま、ら、ぬ、似、合、た、の、む、し、  
 癡、忘、謡、舞、如、作、平、家、か、す、い、う、く、茶  
 の、陽、説、海、た、以上  
 一、塵、塚、六、冊  
 此、編、天、文、年、中、安、氏、某、の、撰

(第壹號)

元、祿、二、年、正、月、中、の、五、日、假、名、序、無、名、也  
 本、書、ハ、假、名、物、語、之、躰、ヲ、し、て、足、利、氏、治、世、の、事、極  
 し、ま、上、世、之、事、を、記、す、著、聞、集、に、し、と、し、其、事  
 物、の、虚、実、ハ、升、百、人、に、ま、か、す、元、祿、二、年、正、月、梓、行  
 一、甘、雨、亭、叢、書、四、十、八、冊  
 子、赫、板、倉、勝、明、輯  
 此、書、近、世、諸、名、家、之、著、書、未、刊、之、小、冊、を、集、め、以、八  
 冊、爲、一、篇、及、六、編、了、其、卷、首、に、勝、明、朝、臣、の、撰、す、る  
 小、傳、を、附、す  
 卷、一、文、公、家、禮、通、考、鳩、巢、室、直、清、著、附、小、傳



卷二 仁舟日北 仁舟伊波維貞著附小傳

卷三 始物餘話 益軒貝原篤信著附小傳

卷四 韞藏錄 剛舟佐安直方著附小傳

卷五 白石遺文 白石新井君美著附小傳

卷六 同拾遺

此編首卷天保亥卯紫瀨古賢煌小竹篠崎崩弘化

二年己蔭月野田蒲浦之三片天保丑七月輯者之

後叙

卷一 西銘參考 綱舟淡見安正著附小傳

卷二 傳史後篇 潛峯栗山伯五著附小傳

卷七 澹泊史論 澹泊寺積寛著附小傳

卷八 湘雲瓊語 南西旅園瑜著附小傳

右弘化乙巳嘉平月輯者目跋同三年十二月上梓

卷一 狼臆錄 尚舟三宅重因著附小傳

卷四 赤穗義人錄 室鳩巢著

卷六 烈士報讎錄 觀嘯三宅緝明著附小傳

附 笠野三平傳 汗菴东涯著

大高忠雄寄母書 赤松溪湖著

大石良雄自画像記 月著

天野屋利兵衛傳 叔惟寛著



卷七

夷內海通記新井白石著

卷八

芳洲口坡芳洲雨森伯陽著附小傳

卷一

尚書考考經識孟子識小傳蘇生芳卿著附

卷二

帝王譜略國朝記東涯伊茂長澈著附小傳

卷三

東涯漫筆日著

卷五

粟川五十四郡考新井白石著遠

卷六

南島義人錄著後語

卷七

赤穗義人錄後語

卷八

所刪阿弥院經春台大宰純德支著附小傳

卷一

存確啓蒙菱樹中江准命著附小傳

卷二

足利將軍傳佐々宗淳著附小傳

卷三

東輯事略琉球事略新巖桂山義樹著附小

卷四

辭帚集栗山愿著

卷五

木門十四家詩集

卷一

病中復信美室主清著上近衛公書宗野邦

卷二

子姪禁俳諧書成島鳳卿著非火葬論祐安井真

卷三

父兄訓林子平著

卷四

古學先生和哥集

卷五

蕃山先生和哥熊沃了介著飛澤山蘇生組



觀放生會記 太宰寺台著 檀垣寺古瓦記 部

南廊

卷六 人名考 准后准三后考 新井白石考

卷七 極々象山侍放養芳極兩松岡吉達著

卷八 忠士筆記 清見安正著 論土屋主稅処置 直

清湘雲瓚語附錄 祇南海著

安政三年辰六月上梓

安中藩 藏板

一 古文零聚

写 八冊

伴信友輯

文化十一年二月廿九日自序

此編凡例一は東寺古文零聚草と題す 卷端に東

寺造營之事を奉く 凡例之略に云 葛根吉從の三

人と文化八年四月十八日より同十一年二月廿

一日まし 彼寺に行向ひ 文櫃面合中より古き考

物の證ともふるへく 相もわたり 限りハ此とつ

も残さして書ぬき 又ホと子心とまるハまたく

写したるもありと 兼文此面合文櫃を見る事前

後五ヶ度なり 今此書を刊るに抄出る処之古文

書十の四ハ散失せしや 傳えあらず 又此に記せ

ざる處の事物の考證に備ふべき 古文書殊に衆



くあるハ此時石合を妻く見たりしか又維新後  
子院廃絶の爲傳えまりし古文書類を納めし  
の子之歴代太政官僧綱の補任舍利年々奉請  
文及公卿高僧旨の消息又ハ名将勇士之下知  
状はハふ山更ふり此一冊子渡したるハむべ  
り細川勝元の書寫斗りして一面余紙ありて  
中々七冊子と、まる一考証書類子あらず卷  
の八ハ附録子其奉る処母尾高山寺処藏不  
り紀伊鞆恩寺和州西大寺は別原田氏尾州大  
直福寺熱田の社一宮地藏寺妙興寺伊勢豊崎文

庫和州東大寺京師松田氏下総國麻取神社妙心  
寺鴨御祖神宮外子紀州加納諸平より寄贈の古  
文書九迎を書写す編中妙興寺に文書子押捺す  
る宇宙の印文を村上天皇の御下と記せしハ久  
我家傳来の説とはハ一と現子此百合文櫃中子  
ある應安文書其外子此印文の押捺あるを以  
て升水ハ又誤水なる事長きを厭ヒ此子は  
略しぬ  
一 山渡周垣成就記 写 二冊

廣澤細井知煥著

古書保存會



元禄十二年長久月自序

此編山陵之諸圖を載ると雖も大和一圖よしして

他國を記す天保十二年伴信友之草稿に洋林

光平増補を加へて圖する処之河内國の諸陵及

日向州其他処にあり是圖あり是後には未考の山陵

を山挙たり

一 山陵圖説

写 二冊

此編享保三四年の比京師の与力石崎在右左

門入江安右左門西人茂内近國の山陵矣族之節

各陵圖を写し玉垣石垣等之修理を極め其後同

与力加納武助飯室助在左門是を傳へ其遺北も

を補ひ稍改めし時の書よしして其砌り処司代水

野和泉守所奉行山口安房守諏訪肥後守也編中

古記を不引用現存の終を写し神武天皇より百

七代正親町天皇に到る

崇神景行二帝難波一条堀川又河後朱雀堀川二

条三帝難波後冷泉近衛二帝難波嵯峨土御門後

嵯峨三帝難波後光嚴後円融後小治三帝難波以

上外子長門國大津郡地吉村に有之安徳帝陵則

異説也是後泉涌寺に御陵に不殘載たり元明元



正之 二陵 當今の所陵處と相遠す但此書之方正  
しき 欽其外後考の如く多し  
抑比 圖説在るや注古の山陵所々散在し山林  
荒廢し 寺内子埋没し士人の後し傾壞する者修  
理せらるし時記ふり

一 山陵志

二冊

脩 靜 甫 生 君 藏 秀 実 著

文 政 五 年 北 峰 山 崎 養 成 序

此編ハ秀実著書九志之一也然而職官志此編二  
志鏤板成神祇志姓族志服章志禮儀志刑志兵志

(第壹號)

之七部不稿成可惜歎此志秀実陵廟之不可識許  
多あるを專ハ單身諸州を履歴し跋渉嘗艱難山  
川搜出探頭記識而其遺跡瞭々如指掌其辛苦可  
見也松下見林作著廟陵記者歷代吹才子録す此  
編子付以固分大知山陵三十有一所河内山陵十  
三所和泉山陵三所摂津丹波阿波淡路讃岐隱岐  
佐渡各山陵一所山城三十有八所自大祖神武天  
皇至正親所帝蓋泉涌寺而經十三世至後光嚴帝  
又以為陵處而後後四融後小松称光後土御門後  
奈良正親所相尋乃爾後陽成以降世々皆為例以

古書集序



葬依以下略之每陵加今按精微を極む聖武一陵者稍跡有り

一 諸陵徴 三冊

谷森大和介平種家著

嘉永四年七月二十日自序

此編ハ營陵 北域 祭奠 土部 陵産 守仁

各案以上七部之区畫を才一卷に記し支より

陵墓は国分子に古書と右陵の下に抄出し其

處在之考証を正く爲す又廢太子后妃及外祖父

母の墓所もして考案を古記録に採り付し其處

在を分明にす

一 歴代廟陵考 写 一冊

淡野中務少輔長祚著

此編ハ元禄十二年に撰じ廟陵記に自神武天皇

至東山帝に處在不分明の山陵ありしを享保年

中再考を加へ諸陵之地を詳委にす處目代版野

河内守美成京令本多汎後守忠英長田越中守元

鄰等之再檢ふり然れ共此兩度に於て處在不分明

の二十一陵ありを改二年五月再三寔檢し及

以五帝陵の不在を分明にすり此の時淡

古書保元會

古書保元會



氏...京都町奉行奉職中なり

一本朝軍器考

十二卷

新中元強守源夫著彙輯

室永六年二月越中南景衡元文改元六月欽日新

川平元成之二序享保七年下元之日安積澹泊舟

跋

允例よ云此書つとめし本朝軍器之制を考ふる

事と要とす此ハ異烟の制を議する子及はす上

神代の姑めより下ハ近き世に到る迄代々子

改りぬる軍器の制を考て其文獻の徴とする子

是此のの升を取水り兵家子傳ふる処ありとい

一其其説之疑ふ一き事あるをば敢て不載軍器

之制悉くかたとり得る子堪す別は其因を作り

て書終に附しぬ此書撰用書目二面余部あり

卷一 旗幟類 十三條 卷二 金鼓類 四條

卷三 節鉞類 四條 卷四 弓矢類 四十九條

卷五 弩砲類 二條 卷六 火器類 三條

卷七 矛槍類 三條 卷八 劔刀類 十九條

卷九 甲冑類 廿七條 卷十 鹵楯類 一條

卷十一 帷幕類 五條 卷十二 鞍轡類 二十一條



元文五年五月上梓添圖式二冊但集古圖說也

一 軍器考餘 軍 一冊

宇治田志鄉表

卷端自序云白石翁之軍器考云淺たるを神云

一 軍器考踵 一冊

著者知水才

此書前之二篇云於淺たる甲冑を始め少く補ふ

といへとも漸々只三紙之小冊也金革堂梓行

一本邦刀劍考 軍 一冊

香山辨原一学長徳表

安永八年孟春日假名自序

此書…戦国の比上古の刀の制と変し武備云深

切なる気象の噂も書集め証蹟も掲げ今世云公

家武家云用ゆる太刀刀の品類と擧げると天文

弘治より以来安永之頃云下礼式小用ゆる製作

と年する年と要とせり其圖十三紙あり此圖に

より猶云事と知り易からしむ

一 日本古義 四冊

南紀高永正朝著

卷端本居大平之序の末云左之哥あり

古書備考

(第壹話)



水末の心も知れと梓り飛きてをしふる古と  
し北

此書才一も射禮之事年光長画射場始畧因土

才二笠懸之事大造物の事射藝の事正日置前像太

古之弓の事古今弓の製し事梓弓の輒因丸の木因弓

引の菱因太古の矢之事伊勢以神堂以矢の因大

朝鮮根因引目縮之事誕生引目之事弦の事箭

之事國叔調度懸の度會戸秘の事矢籠之事右毎條々も其理由を古書より抄出して考案を

附し太古上古古代中古と区別して其沿革を詳

よ記す天保戊戌刻本

一 犬追物記

写 一冊

記者詳かならず

正徳四年十一月十三日於武州王子村島津薩广

守光久與行せられ得軍家光公御覧ありし當日

之規式又其後日之褒賞まし詳細よ記し鎌倉時

代の古式を知らしむ

一 古鑑色目

写 三冊

伊勢平藏貞丈著

明和八年正月自序平義器誥と題書す



此編卷端の古書中より古鑑之名目を抄出し次  
に引用書廿七部を挙く鑑用大刀矢直垂鞍服  
巻弓烏帽子筒丸等一：部分けしなして記す  
一 尚古鑑色一覽 二冊  
本間百里輯  
天保四年五月平良秋假名跋  
凡此編ハ鑑のおとし毛は図を以てし傍に先輩  
の説をあらはす物し旧記物語を引用すまゝ名  
ありし図を欠もあり二百六十一図を載たり天  
保四年五月上梓

一 経邦典例

写

一冊

新井筑後守君美著

冠服考

垂仁皇后之禍

仲哀崩

古事記不孫

神后之事

應神位是笑

應神非十四日生

大

連之乱

馬子弑帝

大化元年八月懸鐘設置

穀在唐僧中罐標

以上諸旧記之抜萃に今按を載たり

一 人名考

写

一冊

新井筑後守君美著

此書ハ本朝ノ人の名漢字を用ひられしより以



或ハ文字を音をもてしるし或ハ文字の門を  
以てしるし或ハ文字の音を訓とを併せ記し  
人ニ之意の欲するまゝに記して文字の数の足  
まらざりし上世の帝王或ハ室町家ニ義詮義教  
等の乱離之名を論せし也

一 姓序考

一冊

細井貞雄著

文化十一年三月北村久備并自序

此編ハ姓名録のいふがしき処々を考へたる也

し

直人 朝臣 宿祿 忌寸 臣 連 公 首

同造 伴造 縣主 直 村主 史 以上国史

下升一し十四種姓を集へて其序次を考へし也

のりし道師 稻置 式上 部 卿 国司 郡司

以下ニ事おも詳し述る

文化十一年甲戌五月梓行 詞花藏板

一 俳優考 一冊

新井筑後守君養著

此書は異朝俳優の考を悉詳ししるし次ニ本朝

俳優ハ神代よりありし事あるは日承紀中ニ其

古書備考



名あることと述へまより猿樂田樂の雜伎のはし  
めより觀音はしめ四座は今派の事歟とよく考  
へしるす

一 花傳鈔

写 八冊

觀世世阿弥著

卷端自序より云々申永延年のこととわさは此因の  
はしまりよりあり中畧秦川勝勅を奉じ卅三番  
の能を作り初ま今の様好る能の心なく和哥を  
五声打はやして一曲一かたして一座の庭ましよ  
てありつるを中比行田股部、兩人曲に名人よ

て此能を再奥す後兩人六十六番の曲をそ一た  
る也今の能の故是也行田、今春股部、勸世に  
源也下略能をおしへ習の大事を傳ふ処、花を  
傳ふる也とて花傳書と是を号するど云見花傳  
の次第と云ハ

卷一 能の諸口傳三十七ヶ條を記す

卷二 調子の次第九十一ヶ條を記す

卷三 謡の極意八十五ヶ條を顯す

卷四 鼓の極意二百三ヶ條を書記す

卷五 能に秘傳百五十ヶ條を記す八形あり因



卷六 古人能の極意七十一ヶ条を記す

卷七 はやししの奕儀九十七ヶ条

卷八 稽古の系三十五ヶ条を記す

此書足利將軍家へ指あけし処の由奕書子見ゆ

一 童舞鈔 三冊

下間少進法印仲康編

此書仕舞之秘傳を書記す當世功者の言系を以り以訛私の説を加へざるよし奕書子見ゆ

千時慶長元年居諸 下間少進法印仲康花押

一 木札考 一冊

新井筑後守君義著

此考ハ倭名抄源順の説多識編林羅山之説又ハ

貝原馬信稻若水朱舜水等の諸説異同を述一次

子自己の考案を委しく附録す

一 草水性譜 附有轉木図説 五冊

清原重臣著男重光校

文化八年臘月唐橋右大弁在經以漢字叙次子自

序凡例文政十年丁亥冬泰島後序并附記

此編専ら草木の性質奇異なるもの具名條の差

謬を考訂し漢名の下子別名の由處を注し且四



十八種の畵図を挙げ其事を分明に附記すは  
新毒の草木六十二品の図を掲げて其説を詳し  
す文政十年上水  
一 田制考 写 一冊

新井元後守君養著

天正中豊臣太閤一畝の田三百六十歩を三百歩  
を以て一畝と称地ありし尺歩の事上世孝徳大  
化の田制量之事當時に親の事等を問答ありし  
畵なり

右は先生何人子問此しといふ事を詳しと

いへ共見るに随て是を録す 兎玉 懐

癸巳二月廿六日

一 田園類説 写 二冊

谷猶古齋の本草教輯

此編ハ寛延年中之輯録にして其篇目ハ如き

- 一 間竿之事 一 町従取之事 一 大半小之事
- 一 貫高の事 一 永高の事 一 永の事 一 村高
- の事 一 旗地之事 一 石盛の事 一 根取の事
- 一 一厘附の事 一 一厘取反取之事 一 田畑名目
- 事 一 割附免状の事 一 諸国石代の事 一 本



石計立出目米之事 一諸國表入之度 一口米  
 口永事 一反高見取之事 一浮紋小物成之事  
 一高城之事 一出作入作越石持添之事 一  
 質田地之事 一十作永小作事 一國郡境秣場  
 之事 一取上田地事 一名主組頭五人組之事  
 一夫食種貸延賣之事 一損見坪所之事 一古  
 今租稅之事 以上引用する処の書目中は四五  
 種の珍書あり  
 一玉考 写 一冊  
 新井筑痕守君美著

此書はいし先生の時玉を以て寶とせし事  
 と述へ次は珊瑚 琥珀 琉璃 瑪瑙 水晶  
 琥珀 瑪瑙 車渠等の産処また其形状を記載  
 す  
 一宝貨事畧 写 一冊  
 新井筑痕守君美著  
 此書巻首に本朝宝貨通用事略と題す記載する  
 処は  
 金銀銅玉の度 金銀の制之事  
 本朝の金銀銅外國へ入し事



古書集成

右之内外国一入し惣数ハ此足織田氏豊臣氏徳川家國始の比ハ裁不詳故子正徳五年より宝永五年迄の大概を挙ぐ但長崎一港より外国へ入し金銀銅の大概あり

一金三百三十九万七千六百兩正徳五年より元禄

十一年間一銀三十七万四千二百九貫月

一銅一億一万一千四百九萬八千七百斤寛文

元禄三年此竟ハ粗折焚察ニ記子雖被載又爰子其大要を

論し我國子有処ニ故より貳倍余外國へ多く入

し事を被慨也

一 起證文證 写 一冊

同著

此書は上世之起請文者自誓而後世の起請文と

相違を考へ古記を引拠して分明き居せり

一 決獄考 写 一冊

同著

此篇ハ我支を殺せりとして其父と兄とを官子訴

へたる婦あり此女罪せらるへき也吾を和漢リ

古書集成



例を引て論す

一 壺碑考

細井広澤知慎著

写

一冊

享保十四年九月廿五日容軒太白山人の跋

此編ハ奥川多賀城址の壺碑帖のしり碑西全図

三稜小図

壺碑全文

附詩

壺碑考

附和奇

碑面考證

壺碑審定説

如所信怨

壺碑審定跋

題名考證

壺碑帖叙

全碑大幅辨

碑字

考證

壺碑跋

壺直清

一 匡家古籍考

写

一冊

壺山逸人著

長谷川菅緒假名序次の附言有之

此書ハ我國の匡書古昔ハ甚多クして今世に存

する者少シ其残欠の書或ハ古本の遺水るもの

を博く搜求して我國の撰述の并を採り其名

家子藏するの秘本を能く挙たり蓋し大同類聚

方の如き二尊院不傳東寺処傳宇治本真田本畑

本雲加并桑文庫本浪花吉田本備前田中本養徳

大垣本錦小路家本其餘諸国散在に故本を考案

し其中偽書ハ分明に弁じ金蘭方以下六十五部

古書保蔵會



を詳細に記す附録に送方雑説あり

兼文按するに東寺処傳本今はなし文化比に

はやく散失せしよし該寺にし聞けり

一 傘堂考

写

二冊

屋代弘賢著

此書和漢の書籍中より引採して傘の考案を詳  
かにす傘の字ハ説文に処見なく玉篇よりして  
出る事隋唐に多く此字を用いた水と全く象形  
の意あり造る字なる事もし微細に述へ且因は  
妻古き繪巻物より引用す其種類の目ハ今

始付文字 名目 細工方 大差 日午 雨午

墨午 瓜折午 笠袋 午時 追加笠始 名目

菅笠 竹笠 編笠 檜笠 シハ笠 心シ笠

ツホ笠々着等あり

一 経游辨

写

五冊

著山熊沃了介著

一名備今時格活法要録

一人君之事一人臣の事一富有大業之事一夷狄

に備身外不意の野ハ凶年を救ふ事一公儀の御

蔵國主共五穀沢山に事附不に者亦く盜



賊なかるへき事

一諸浪人不残有耐遊民並に産ふき者斤付困窮

人尽く救はるべき事一農兵の昔子かえりへき

一一切支丹の法究明の事一佛法究明の事一神

道究明の事一賢者仁政の事以上を問答書しせ

しふり

一經濟辨

写

一冊

来名少将定信朝臣著

此編ハ左の三件をよく弁説せしめ以て修身

家治国安民の一助とせむと欲せらるゝ也ふり

一救急説

一清茵説

一時士者用論

一林子平思慮

写

一冊

林子平著

此篇は統計九編五十九ヶ條委々仁皇藩の政

法を論じ偏國強兵の基礎を量り大に士風の悪

弊を除かむを説き就中選者の大禄を歎息せ

り其九編ハ学政武備制度法令賞罰

地利儉約章服雜也

一新政談

写

五冊

菱森天山大雅著



安政二年十二月癸酉子日右は去月御尋子付  
大意并ヶ条目録認差上ル処去月又右ヶ  
条目録一認差上ル様御所付早進相認可  
申処久病氣在延引奉必入ル其内歳除近  
相成ル付各病中押テ相認ル間早之次才愚  
存不行届甚不文ル処多く御座ル旨御宥恕申  
覽被極被下ル様奉願ル以上其条目ハ  
御尋子付上書ヶ条同和漢ヶ条天下國  
家ヲ治ル条御經洲御取締大意御女中三  
分一子減少之事諸役所と減少之事役処人

別減ル事無用の費者方之事此年子ハ  
禮を殺ルと申事普請を手輕子する吏奸賊  
の罰を嚴にする事天下の財源を削テ融通を  
便にする事奢侈を禁ル風俗を正すヶ条對院  
御取扱のヶ条六事人才取立并撰升方文學処  
武学所洋学所取立等ハヶ条邊地兩方箇条  
等八事也  
一 草莽危言 五冊  
竹竿并積善著  
寛政紀元己酉之冬漢字之自序

古書保蔵會



卷首云謹按スルニ賞罰ハ國家ノ大柄ニシテ偏  
廢スヘカラスルニ至リテ生殺ヲ相待テ歲功ヲ成  
カ如シ今此卷ニ論スル処ノ賞ニ在ラズシテ偏  
ニ罰ニヨリ或ハ以殺氣紙ニ溢ルトセシカ然ル  
ニ愚意ノ専ラ注リ処ハ此地ノ頑弊惡習ヲ剷除  
セシト欲スルニ在故其說偏主ナキ事能ハサル  
也總ノ政ヲスルニ舊害ヲ祛カサレハ新沢ヲ施  
スニ所ナシ况ヤ弊害既ニ改マレハ利沢才ノツ  
カヲ其中ニ存シテ別ニ施スヲ得サル物ニ与ラ  
ズヤ愚ノ卷中ニ於テ再ニ意ヲ致スル實ニコト

ニアリ凡物翕聚セサレハ発散セズ故ニ秋冬ノ  
收藏嚴凝ノ気ヨク密ニシテ洲サ、ルハ次年春  
夏ノ発生條暢ノ気必醇クシテ能周キハ自然ノ  
符也明君賢佐好生ノ徳を以海内雍熙ノ化ヲ致  
シ玉ハシニハ豈マツ意ヲコトニ角ノテレサル  
ヘケンヤ此卷中ニ載ル処ハ屢ニ幾句一匹ノ地  
ニ止マレ共瓶水ノ凍ルヲ見テ天下ノ寒ヲ知ル  
イヤシノモ此意ヲ以テ是ヲ推ハ四海ノ内准セ  
サル事ナカル一ニコレ匹ニ至願と云兼文曰  
此編王政霸道ノ差別ヲ詳ニシ時弊ヲ痛論スル

古書  
保  
存  
會



事多し 雖然著者坂府ニ任スルヲ以テ其地ノ弊  
 害ヲ挙ケテ天下ニ致シ、ル事不少大佛殿ノ石垣  
 シ以テ鴨河ノ暴漲ヲ防ク説ハ笑止ノ極也此条  
 目ニハ王室 謚號院號 年号 曆日 皇子皇  
 女 公卿百官 國家制度 宗廟 所上洛 諸  
 侯室家 考勤交代 國替 受領 諸侯分地  
 諸侯大借 麾下 奉行代官  
 武門叙任 御番城所著請 武門養子 武門元  
 服 衣服制度 學校 儒者 外舶互市 朝鮮  
 琉球 蝦夷 地理 水利 浮沓 龍尾車

別駕車 金銀幣 鉄幣 物價 常平倉 社倉  
 戸口 仏法 寺院 出家 淫祠 旌表 養  
 先 窮民 祈禱 年忌 米相塚 博奕 寺社  
 富 盜賊 隱匿女 歛埋所 淨琉璃 神事地  
 車 練物 寺町僧侶 米伴仕 町中馬方伴仕  
 毛穴 捨子 久離殿 身上限 町方婚礼 送  
 葬 死後跡式  
 以上六十六ヶ条也  
 一 草茅危言摘義 字 五册  
 著者詳カホリテ

古  
書  
保  
存  
會

古  
書  
保  
存  
會



此編ハ本書ニ誤謬と抄出し其議を破リ毎条  
下ニ論駁す著者ハ備前岡山ノ医生某氏野下似  
居中其姓名を隠して著す故ニ其名を知らず  
本編十二三を挙げ全部に至らずして字を  
しと覚ゆ

一新集

五冊

山陽萩裏著

此書ハ六界八職二十三論よりして流却今ハ  
リありて五論不足す以六冊為全部其編目ハ  
如

卷一 輿地略 封建略 官制略

卷二 兵制略 財用略 法律略 古今總議

平安議 前鎌倉議 後鎌倉議 中興議

室所議 安土議 大阪議

卷三 君權内治 大臣監官 銓史革弊 分祿

等位 用人 取方 均田墾籍

卷四 賦利之計 務農勸耕 裁商權酷 平均

穀價 窮盡地力

卷五 水利之術 錢鈔之制 銅工之禁 征課

厚薄 積旌輕重 法律因革 訟獄利害



一 新論

會沢正志著

二冊

此書は五論七篇にして克く其理を尽す小河一  
 敏の著したる尊攘萃録に云久留米の神官真木  
 和泉守保臣ハ此新論を升て深く感し水戸より  
 て會沢の門子入たりと載る以て其論の的実亦  
 ると知るべし其五論は 國體上中下 形勢 膚  
 情 守禦 長計  
 一 及門遺範 一冊  
 同著

此篇卷首に會沢氏に著書目録三十四部を均け  
 たり會沢氏其師荻田出谷の川此より其平素門  
 人の教授方若臣の大義を重し大義名分を明し  
 し國體を論するは義公に遺意を以てせらるる  
 事或は虚文を後ししし実行を先せらるる也  
 又、業根書目の事文武一途の義其朋友に各豪  
 傑ありし事先儒然沢了介山崎闇舟伊荻東涯菴  
 生如来新井若美等之学风の不固を論し其外荻  
 田氏力学の事を載たり

荻田出谷ハ東湖ニ文政九年十一月朔日五十



三六子て病没す

一 殊跡支略

写

二冊

新井元後守忠著

此編ハ外国と之書式を考へ次ハ朝鮮国と近時  
往來之諸礼を正し来聘使と問答の事ふとを載  
る本文大意は日本天皇の御事 日本国王の御  
事 本朝異朝の天子往來書式と事 異朝の天  
子外国王日本国王と往來書式と事 今代外国  
来聘の事 外国往來書式と事 大君の御跡取  
止事 復号と御事 御室の御事

此条子家康公以来外国との書通ハ御講子別  
の字を用ひられし事を載す

家康公ハ源忠親 家光公ハ源忠環

家細公ハ源忠直 細吉公ハ源忠教

此事は足利の時代大明へ被送り書子

義満公ハ源道義 義持公ハ源道詮

義政公ハ源道慶

是等ハ例を以て崇傳長光撰進ありし歟

朝鮮使後議ニ支

此条は上巻子託すれし事のまゝ相違し又誤



聞を改正せらるたり或は其後発明せらるる  
条を被挙

前代所在世に日某未夕此書を得ずハハハハ  
言上之趣其詞微細ふらず見多の博からざるか  
故より一は自ら羞自ら恨て山指餘りある事共  
子侯

正徳己未春二月廿六日 脱藁 源君養瑛

考正 此条は對ぬ之孺臣松浦歳右末門之著  
して此本書子記す処其事実を誤り又ハ其理子  
當らざる子似たるものは後生之惑を憂ふるか

為子暫く其大略を考正して是を他日子傳ふと  
云々

此編對州処臧瓜を以て写之了

一 觀樂客館筆談 一冊

輯者詳か知らず

此書正徳紀元十一月三日於幕府賜燕樂於朝鮮  
使者沆後守新井君美与信使趙泰億坐間筆語自  
石著 及同十一月五日於客館趙泰億与源若養筆  
話せし江關筆談趙氏輯之二編を一書とせしもの  
のふり從事南岡副使青坪与之談話多し



一 外國通信事畧

写

一册

新井筑後守君義著

徳川氏國始之比より外國十四ヶ五と通信あり

其國五ヶ事を記載す其ヶ處は

安南 東埔塞 呂宋 暹羅 亞馬港 卧亞

太泥 占城 阿蘭陀 新伊西把弥亞 漢ノ刺

亞 塔伽沙古 伊西把弥亞 田彈 以上

一 外蕃通書 写 廿七册

近々重藏字重著

此編本邦徳川氏と外蕃往来之書式を載す

卷一より五迄朝鮮六七阿蘭陀八九十明國

才十明國之部に招討大將軍鄭成功の上書あり

り則ち援兵を本邦に乞ふ處あり

十一より十四に至安南十五六七暹羅國十八東

埔塞國十九同北占城太泥田彈廿一二三呂宋廿

四五阿媽港廿六新伊西把弥亞廿七漢人利亞國

等也

一 外蕃通略

写

一册

松隱吉田矩方輯

安政四年三月上巳日自序及自跋



此編外蕃通書抄録にして其書式を論ず上は  
慶長十二年より下安永年間子到る外蕃十四  
ヶ国とて往来する処あり

一 鷄林拾葉 写 八冊

一 瑪保己一著

文政六年二月林大守頭鏡并素男之兩序野々山  
義并跋小序子曰雞林新羅也扶餘西溷也此  
書初号三韓紀事既而改於今名瑪保先生掌詢之余  
余以所聞告未及再改而先生歿故託於此欲無使  
世人疑於先生是謂也

此篇日本紀以来豊臣公治世迄國史子扱て朝鮮  
之事跡を摘抄する処あり

一 中外經緯傳 写 二冊

一 伴信友著

此編ハ此皇國子支那國より來たり此方より也  
往来し又彼國々を治め給ひ又文字を傳り其  
國籍を讀み其行ひを學びとりて用ひ給へる事  
共其初を古史より考へら水し内天明四年  
汎前國那賀郡志賀島石窟より堀出したる漢  
委奴國王の字より其考へおも委し人記す又



菟道稚師子のうへの事おしむ考へ尽し、といふべし附記は満州の事を録する中は源義経の本あり蝦夷の事を載す且安東撫崎両家の奥りなどおもよく考へし書あり

一 右文故事

写 十六冊

近菟重藏守重撰

文化十四年九月十日此書献納の趣意書あり此編は市本日記附住三冊市本日記續録三冊市本譜一冊市代々文事表五冊市代々市詩奇三冊慶長勅政考一冊合十六冊を以て一部とす撰

者は徳川氏に市書物奉りを勤め紅糸山市文庫を預り其市書物の由来を相乳し慶長御写本并序板本ハ勿論家康公より二代將軍秀忠公へ御讓本と類其次方を明白に記す皆古書を引出して詳細明確大ニ古書考案の助となる

一 経籍訪古志

写 三冊

海保元備補

安政丙辰長夏月海保氏に序述江道鈍森之に附言

此書の発端は柳田将谷望之より小島宗素丹波



古書保存會

薩庭子嗣き海保氏子大成全備する処子して宋  
元の古版及び朝鮮刊本又「我朝慶長以前之古  
写本珍書」に在るを詳かにし經史子集医書と区  
別す佛書は採らず此の字師福井氏に藏書は甲  
子の乱に灰焼に化し又東寺仁和寺神護寺等処  
傳し古籍に一も不載あり

一 古梓一覽

写

一冊

西村兼文著

此篇は我國子於て梓刻の古書百萬塔中に三種  
陀羅尼經ハ神護景雲三年四月一日に証を挙げ

夫より弘仁版仁王護国般若波羅密多經天安二  
年十一月版成唯識論を初とし下ハ慶長十六年  
子到り一百四十七種の内外典籍の紀年跋文を  
掲げ支那より鑛版に古く我國子行水たる事共  
を微細に記す

一 琉球事畧

写

一冊

新井筑後守君義著

此篇に掲ぐる処は異朝の書に引へし琉球国の  
事琉球國人処中其國の事同冊封使并朝貢使の  
事同職名の事此書琉球歴代二十五世國王の略

古書保存會



譜を載す

一 本教異聞

写

三冊

鶴峯稻葉成申著

文化十二年孟夏自序稻葉秀長武荻吉紀兩跋  
此編神世天七地五の傳来の眞義を略述し漢土  
西洋諸國の傳説を引合也天地日月萬事万物の  
理を窮め万国一統の教法の事ましも委しく論  
し本文漢字を以て記し總似名付しして初心の  
輩にも讀易からしむ

一 楠石論

一冊

秋大秋絶外著

宝曆辛巳冬十月自序秋圓中大理後叙  
此書は楠正成を爲非十三隻を擧ぐ一事も採る  
必ふし又大石良雄の七罪を擧ぐ皆不識大義僻  
説あり後序に楠石を爲臣也擧ぐ世以稱忠義久矣  
蓋斯論其情偽者於秦鏡顯奸照妖無有遁形可  
謂公論矣  
抑楠公良雄を以爲奸爲妖以爲公論浮屠不殊名  
義是大子世の風教を紊乱する書あり

一 二中歴

写

六冊



編者知らず

此書古く編輯よししと採り用ひし事多し

卷一 神代歴 人代歴 至自 神代天皇 太政天皇

追号天皇 殺帝 薨逝太子 九 廢太子 十

辞太子 一

后宮歴 后妃 至自 武后 皇子 子 四十一女

御所尚侍

女院歴 研宮 女院 仁明 以 疾

卷二 儒職 官白 都督 廷尉 循吏 酷吏

諸司 祭主 自推古至 保安四年

卷三 佛聖 大師 造師 教法 仏具 法用

祖師

但し祖師ハ天台真言三論法相の四宗ナ

リ

卷四 僧職 座主 僧教 法場

卷五 乾象 方隅 八卦 属星 歳時 年遠

行年 閏月 日計

卷六 坤儀 種樹 開路 諸國 請年

弘治三年丁巳十二月十五日廣橋家ニ奉修南院

一借被下之間令借用写之急速仁可返上之由被



申條以惡筆令頓寫定、可有多端者也

權僧正實曉 卅九

一本朝蒙求 三冊

仲徹菅亨編輯

延寶己未某臘月自序貞享三年正月菅謙由益甫

跋

此書ハ漢土之蒙求ニナリシ以四字ヲ標題四  
面目也故ニ天皇ノ追號三字ヲ書スルニ若シ  
テ不敬子也所講ヲ犯シ奉ル如キ條アリ後人注  
意セヨ貞享四年梓行

一 稱呼辨正

留主友信著

室曆七年三月兼原典請梁田邦壽之函序

此篇卷端ニ曰蓋稱呼失其實名今考其倫先聖既  
有不<sub>レ</sub>觚之歎其<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>則原豈少哉雖然今世因襲之訛  
不可<sub>レ</sub>猝<sub>レ</sub>變學者當改其可<sub>レ</sub>改者也而於其不可<sub>レ</sub>猝<sub>レ</sub>改  
者則姑<sub>レ</sub>曲<sub>レ</sub>從以待<sub>レ</sub>他日可<sub>レ</sub>也文人從事華藻之末忘  
其<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>實猥改其不當改者強擬異方之制亦何心哉  
回<sub>レ</sub>輯蒐先儒泊今世所見聞諸說附以管見為同志  
講究之資云寬延二年己巳春三月友信書于浪華



居

國郡郷里方一十五條 中國夷狄方二 五條

官爵職掌方三 三條 姓戶氏族方四 十五條

從名実名方五 十三條 五倫九族方六 卅四條

神號人事方七 八條 存名神諱方八 九條

神主題號方九 十條 公私謚號方十 十五條

留主氏者山崎門三宅尚幼子學其師説を以し

仁姪祖未太宰ノ説を破する事多し編中皇漢子

涉り克く孫呼を弁明す就中王室霸府に差ひを

世儒の謬乱を各條に挙て名義を明しす假名実

名に部子東西官ハ賦臣將門之処設也云々亦神

佛混淆の附會を論し禁戸の悪習を正明しす其

外可心得事多し宝曆七年五月梓行

一人狐辨惑談 一冊

陶山尚迪著

文政十五年春山陽頼子成栗庵後荻微と西序

此記諸國之俚俗物怪之虚名に迷ひ禍となる事

不少雲伯二川の俗は是に迷ふ事甚敷禍となる

事最多し故に俚俗をして迷はせらしめん事を

欲し曉す事殊に慇懃ふり九州の河太郎事四國

古書刊行會

古書刊行會



猿神の事備前大神の事備前備中日御碕之事備  
中備後トウヒヤウ之夏諸國物怪の事其外咒詛  
家相妖僧等の説を委之破しまし治療カ助をな  
し世俗之誤り来る処を遣夏教条を卷末に附す  
此書もと俚俗の爲にすむ故に國字を用ひ讀易  
かりしむ

一 連歌秘傳風聞躰集 写 一冊

撰政從一位左原基長公撰

卷端自序あり方一条より上句十條より到り水  
哥の秘事を記し次に宣言ありに下の句の心得

十條子及び重難また十條あり

享徳三年甲申神無月廿九日 平則満 記之

一 連歌大成 写 一冊

撰者知れず

此編に載る処は建治二年に編する本式に水は  
清水寺に其風を残りありし由次に應安五年後  
普光園院の御撰新式享徳元年十一月一条太閤  
常恩寺殿之追加和漢編及文亀二年六月牡丹花  
宵始書加へ今案に水は宗祇以来に今案彼是勤  
めたる編より以上之四記を本として撰述し其

古書刊行  
書目録  
保存會



式を詳かきあし讀みかたまき公明にす撰者は  
記せと雖も慶長以前の編あり

一 肖拍口傳 写 一冊

牡丹花肖拍撰

此書は牡丹花より連歌師宗收へ口傳する處に  
し初めれ哥のよみくせ切字難字の事よりして  
発句切字十八之隻嫌詞なるをはしめれ哥一道  
の秘事をくわしく書あらはせし編あり年号名  
花押あり  
一 西國土陣十句 写 一冊

撰者知らず

天正六年五月十八日十九日羽柴汎前守秀吉西  
國土陣に付奥行ありし連哥十句あり其會集の  
人々は

白 秀吉 紹巴 禅永 昌比 心前 禅祐  
文閑 兼如 珙在 正佐 永種 正繁 孝  
与

徳須 宗由 鶴松 友益 虎松 松千代  
以上白ハ聖護院道晃親王也卷末に曰

慶長十二年閏四月廿四日 東庵持六 書判



一 連句集

写

四册

撰者知らず

天文廿四年九月十九日 百韵

言

梅

清譽

宗養

秋采

泰職

留

月

長頼

紹巴

仍景

晴経朝臣

豪仁法下

以上十二人

永祿二年霜月宗養越前公下向之時之充句集

此内朝倉義景同景紀其外の連歌あり

宗養付句五百韵 連歌一座式目ノ哥二百廿八

首 紹巴

宗養独吟而韻 連奇の年本のよしみへたり

年月不詳而韻

紹巴

源増

茂英

玉羅

茂

孝

重職

雅敏朝臣

快典

昌比

等喜

心前

文宗

亮淳

以上十三人

壽慶追善

三好長慶

宗養

紹巴

百韵

天正十九年正月十一日

於安藝宰相殿與行三十六句

文祿三年二月廿三日於昌比私宅與少百韵



紹巴 昌比 玄旨 景敏 英佑 友益 悦

在

白 玄仍 小松 吳

同年於関東成田氏親邸奥り百句

兼如 紹与 了竟 氏親

月五年四月廿六日 紹巴独吟百韵

水魚 漱石 顔 牡丹花 宗祇 宗長 此の百韵為

也千本

由已兼如兩吟連奇百韵

此余天正文祿年間元旦に連句四十二句或八千

句に巻頭発句等載之

一 採茶便記

写

三册

梧陰菴后光寧著

宝曆戊寅三月漢字に自序

此書は享保の始於東都阿部友之進照任松平玄

蕃重康之兩人官命を奉し諸国へ去行して其国

乃子産物を見出し珍物を不々貢獻せし兩人の

口述に后光寧の副筆ふり国分よしし其処産を

知り易かりしめ且本条子極をして後茲氏の考

案を加えたり



一 諸州採藥記

写

九冊

植村政勝著

此書ハ享保五年庚子より宝曆三年癸酉まじり三  
十年の召武州駒場の御茶園御用屋敷に預り  
植村統平次政勝採茶之召命を承けり諸国を巡  
行し書記せしを宝曆五年丙子幕府へ献納す  
る処あり

一 桃洞遺筆

九冊

小原桃洞遺稿同蘭峽輯録

天保四年三月近安好道水居太平と西序

小原桃洞ハ紀州藩ふり本草学に達し其考証  
を和漢郡書中より抜抄して其要を採り自ら深  
山幽谷を跋渉して目撃する異物を載せ間々其  
意を加へて見易かりしむ天保四年仲夏刻成  
一 埋麿発香 写 一冊

穂井田忠友輯

天保十一年十月廿九日輯者後叙  
此編ハ南都東大寺正倉院古文書中写し印影  
しし延暦遷都以前の由り而已ふり其印章ハ

中務 式部 治部 兵部 刑部 大藏 宮内



古書  
書  
傳  
在  
會

省  
春宮坊  
左  
右  
承  
職  
内侍司  
造  
東寺

東大寺  
東寺大成  
東寺綱  
寫書  
処

寫經生  
生島息鳴  
島豐名  
畫師  
池守

足万  
大倭國  
山脊  
和泉監  
撰  
律  
伊  
笑

志  
廣  
尾張  
遠江  
駿河  
甲斐  
伊豆  
相撲

安房  
下総  
越前  
越中  
佐渡  
但馬  
因

備前  
土雲  
隱岐  
播磨  
備中  
周防  
長門

紀伊  
淡路  
河波  
筑前  
筑後  
豊前  
豊後

薩麻  
近江  
美濃  
丹波  
大和  
因幡  
倉

十市郡  
山城  
宇治郡  
坂中郡  
足羽郡

阿拜郡  
桃尾臣  
臣部者  
内家  
私

一  
物計七十印影也  
一  
冊

一  
温故餘  
一  
冊

雲臺菅合章輯

此編  
天皇御璽  
二種  
太政官印  
六種  
諸官印  
諸國

一  
諸寺印  
文庫印  
名臣印  
等  
七十二種  
輯  
書

一  
名鑑抄  
一  
冊

此書  
承應  
万治  
比より  
正徳  
享保  
末年  
到

リ  
諸侯  
伯之花押  
を集め  
卷末  
及ひし  
紀品  
尾

州  
水戸  
等の  
家臣  
に到り  
まじ  
其花  
押を  
輯め  
たり

古書  
書  
傳  
在  
會



古今茶人花押叢

一冊

半靜庵政通撰

天保甲午秋成島 直漢字叙

此篇ハ世ニ茶人華押菽ありと雖も庶漏よしし  
頗る募きさい名家花押菽古押菽等を抄録し且  
諸家之華押を輯録して補助する処凡人員二百  
三十二人其草名ノ吳あるは千宗易如きは廿二  
種を載す其他と雖も一人數々を挙る者多し天  
保六年の冬梓行す

續茶人花押菽

一冊

河津蓬永輯古筆了意閣

文化乙丑冬太華宸序

此篇東山義政公より近來ニ到リ茶人百廿五人  
之花押を載す然も義政公信長公の如き別編ニ  
既ニ挙ると雖押字ノ異様を獲又稱号の殊しき  
を合し鑑識の爲ニ収む茶人ニ不非して其賞鑑  
するもの又ありし収む元政丈山の如きなり紫  
阜の層ニ茶家の賞する又多し別冊ある故除き  
たり享和癸亥季夏編者凡例ノ大意也

装劍奇賞

七冊



春禽稻系通龍著

天明改元冬十月源頼朝ハ函即猷ニ二序并自叙

凡例

同年秋九月稻系通邦龍公美之二跋

此書刀劍裝飾ニ具を賞鑒の爲め唐皮革歯牙骨

角玉木彫綉するを以て古今名器良工を品定

しつとめし目貫小刀柄筭等彫物の作を鑑賞す

る事と要とす故に後友氏十三代より諸工と系

譜と出す巻端に總論雑述あり六七の巻に唐葦

類図抄印籠師根附師名譜緒ト玉石類を挙人天

明元年九月上木芝翠館藏板

一 必書 携画 名家 全書

清 歙 主人 編輯

七冊

此書唯儒書画の三門に立詩人ハ儒に収め国風

家は其後子附す軒俳人をも附せり編流の如き

ハ書を以て南中ハ精に挙げ詩文を以て行は

るハは詩に収む送家の如きハ詩文に游するは

同し冬小傳を附此編上は千載に古昔より下ハ

近世に至る印章を旨とし落款の如きハ得るは

任せし出し深く索めず文久三年上梓



古書  
傳  
在  
會

一 更新便覽

一冊

久須美孫丸衛門増補

此書ハ蓬来散人著す書子増加をなし未子部類

を分ち見易かりしむ更新の図三十七種は其

捨様とりを微細に載たり書更新下地仕様之事

生臘脂とき様の事藍蠟ときまふの事雜莫とき

よふの事里地の事白く漆ぬきよふの事吹繪仕

様の事金更新の事仕上洗ひよふ

之事古黄付様の事急子書様之事等を述べ

一 古尾譜

字

一巻

荻原貞幹輯

安永丙申立秋漢字の自序

滋賀宮廃地瓦 平城宮殿廃地瓦三種 紫香樂

廃地瓦 平安城古宮殿三種 白虎樓 八省院

六種 神祇官 豊樂院 武徳殿二種 春奥殿

太政官六 式部省三 兵部省

大藏省三 宮内省 大学寮二 雅楽寮 主計

寮 木工寮 典藥寮 左京職 右京職 大宿

直 鴻臚館 穀倉院 廩院 檢非違使 宮城

築塙二 真言院 多賀城 不破關 都府樓

古書  
保  
存  
會



勸学院 清原夏野第 菅贈太政大臣第

以上真形を撰写す

一 古瓦譜

写

十冊

宝静律師編輯

此譜ハ世上ニありといふ限りニ古瓦ノ真写ニ  
して尽し果したリといふべし此宝静律師は飛  
鳥井家の公達ニ初め天台ニ入り右律学ニ後  
リ唐招提寺の住侶より泉涌寺の長老ニ昇リ壬  
生寺を再建し並国法金剛院ニ退隠し古物を愛  
し鑑識ニ富み古經古画類を多く蔵す此瓦譜中

の奇瓦は今も其寺に多く遺りあり

一 和漢錢彙

一冊

芳川維堅編

天明癸卯六月朽木龍橋龍公美中郎父之三序及  
流石庵川村羽積後叙并校

此編日本錢之部一冊刻成中編下篇漢泉之部未  
刻あり和漢之古泉凡三千有餘を真摸して多募  
之品は云ふに不及年故又は錢文の筆者或は決  
文孔郭之名義錢質の好否真偽監定乃に訣に到  
る迄委敷記す爰に挙る処の日本錢の種類は日



本歷代錢金錢類銀錢類繪錢類戒火黑錢類題目  
錢類念佛錢類和同脊類寬永脊類和駒類大錦類  
水戸年加治木錢加島錢永利手等也寬政五年上

梓

一 撰新泉譜

五冊

龍橋朽木隱岐守昌綱著

天明元年丑春三月自序也村繼元長理次叙

編中宇野宗明妹尾柙之説を載す此書未見其

真者不圖得真者奉圖也震旦國錢正用品同偽品

契丹高麗安南國錢日本錢等なり

一 奇鈔百圓

一冊

河村羽積著

天明丙午四月藤應道并編者し二序

此篇は古錢の局題を十五等に分ち讀曲の故實

を挙げ和漢歴代之古錢譜を詳かに記せり

一 改正珍貨孔方圖鑒

一冊

小沢辰元東市撰

天明五年秋九月自序

此編ハ丹川福智山侯処藏古錢之模寫を以て上

水せり



一 寺社宝物展覧目録 写

栗山柴野彦輔著

此書ハ寛政四年幕府ノ命ヲ奉シ任吉内記共ニ

五畿内寺社之宝物ヲ取調写故又ハ取寄子可相

成届々を分ち申子は批評を下したるも多人又

誤りもある処也

卷一 東寺 壬主寺 菅大日 空地堂 知恩

院 下御霊社 東福寺 六条道場 四

条道場

誓願寺 福正院 大雲院 檀王法輪寺

南禪寺 若王寺 銀閣寺 平等院 橋

寺 志心院 興聖寺 通円茶屋

卷二 所隆寺 神護寺 高山寺 大龍寺 妙

智院 三秀院 本能寺 等持院 亀安

寺

卷三 法隆寺 中院 岡今寺 東林寺 信貴

孫子寺 龍田本宮 當麻寺 西南院

護念院 中坊 北室院 檜寺 多武峯

長谷寺 三輪神社 平等寺 釜口長

岳寺 普賢院 布通社 在原寺 龍象



寺

卷四 東大寺 神司安藝守 般若寺 奥福寺

一乘院 茶師寺 唐招提寺 西大寺

秋篠寺 高林寺

卷五 黄檗山萬福寺 佳吉社 啓津守家 熱田

宮 清見寺 寺社之外七家有追加

一 松花堂什宝錄 厚 一册

山城国石清水八幡社 僧滝本坊 什宝書也

此編子奉々 処飛鳥井 雅經 卿雅録 以 敬位 清範等  
之懷 紙俊成 以 和寺 定家 為家 兩筆 一 幅 伏見院

尊田親 王行成 卿為家 卿一休和尚等の墨蹟 利休

奢之 注文 緊菴之 布袋明岩 正因墨蹟 雪舟 達广 李

迪舜 琴 牧溪等の 画 其外 畫画 多く 表装 箱書 末し

記す 又名 物茶 器等は 画を 載せたり 其後 子 松花

堂の 画 大有 宋南 叔奇 屋の 画 あり

一 畫工 便覽 厚 六册

此編 画人ハ 帝王の 年代を 以記す 卷一 推古 帝子

始リ 仁明 帝子 至リ 共 五人 卷二 目仁 明帝 至 鳥羽

帝 五十六人 卷三 自近 衛帝 至 後光 嚴帝 七十一人

卷四 自後 小 於帝 至 明曆 帝 而 共 五人 卷五 土佐 光



信より同族六人狩野氏ハ正信ヨリ尚信子到リ  
四十人未勘四名巻六画法画論賞鑑粉本及以画  
師之系図類種を挙げ各其師を注し其小傳を粗  
附したり

一 皇朝名画拾彙

写

五册

檀山義慎撰

此編ハ古書中より抄出し以画人之小傳を簡易  
に挙ぐ巻一宸画聖武天皇外九帝雜纂画部因斯  
羅我阿佐太子黄書画師山脊画師を始め櫻町成  
範口女及頼源頼成等九十三人巻二式子内親王

俊成卿定家卿以下法師通曉宗舜子到り八十五  
人巻三足利義詮公より秋岳月浦子至り八十二  
人巻四蘭溪禪師より繪所侍従及樞屋子到り石  
五人巻五豊臣秀吉公秀次公より狩野永敏子至  
り八十四人通計四百六十三人時代を進て書記  
する故子公卿僧侶武侍夫人庶人等混合す

一 考古畫譜

写

五册

古川躬行者

慶應元年九月下旬假名自序

巻の一八目錄子して七百十二種之引書百四十



二部を挙げ此書五十字音より順序す山科元  
縣圖画一覽交原貞幹同朝書目好古小鏡鑑年か  
画図目録伴直方が画図不類柴邦彦か寺社宝物  
展覧目録兼名少将之古画類聚引用目録杯を本  
とし馬川春村同貞頼鈴木真年山崎知雄等の説  
を挙げ著者之考案を詳かす日本古画本の類  
聚す之を大概大成といふべし其凌じたる説  
と減たるハ補しやすかるべし多くは其真物を  
熟覧して説を微細に尽したるハ其鑑識といひ  
古好之博學なるは感歎す又し近く東京博物館  
子於て尚注を下しアイウエの二冊を刻本とせ  
ら水た

一 梅園奇賞

一冊

梅園道人輯

文政十年九月本居大平後叙

此篇は浪花人梅園道人処藏之古物と平素見及  
以たる珍物を併せて図録とする処より其不々

八幡形冠甲冑正安二年後元月智證大師大法師  
位勅書嘉祥三年六月八幡殿軍容図積善院公師古



唐四種舊法隆寺和琴柱口東大寺南大門狛犬縮

因 伊豆國書名寺古井施光双銘 菊燈台因

首寺掛古石因東山勝伊勢外宮塔古石古鏡破裂

因 古鏡三種鏡之社古午 鏡四種大般若經和

個 古田書 天王勝年神宮司牌口分田坪付勘文

延長七時七束大寺文袋 東寺大般若經籤高野

小經卷中夾葉 法隆寺法華經牙籤 菅家処用

象牙字指 法勝寺古瓦 東寺華經金物 織物

蝶圖 聚樂邸猫金巴瓦 古織物紋八種 曲玉

管石 五子古冠十一種水櫛二毛拔 缺 砂金包

三 古烏帽子十七 硯箱二 枳櫃 唐櫃二 石川年

元墓碑 村上義光鐸 大和漢國社曹 棟公甲

金物信貴物梳木鉢二 鞞袋 色紙形 洞伽棚

法隆寺高燈臺<sup>分二</sup> 文袋 法隆寺經筒 葛蒲草

十義滿公兜<sup>法紀良社前</sup>義滿寺像 馬尾 古印十七 笈

法隆寺金堂黃金佛後背銘

同寺什架袋箱 以上文政十一年嘉平月上梓

一 冷法閣帖 一冊

攝州市影村市殿某所藏也 影写如左

應神天皇木像 聖德太子像 山脊王像 志慈



古今圖書集成

法師像 小野妹子像 藤我馬子像 五德博士

像 川原麩麿写 經用紙解 天平字字紀年經

跋 仁壽紀年田秀 貞觀紀年田秀跋 文館詞

林跋 越前國送米文 乾元一具珪曆文治五年兵

書斷簡 河內國大稅負死亡人牒 元平集卷 永

久記年田秀并籤 經籤二 經高 五鈴鏡 弘仁

紀年礎石 白鳳紀年誌 和銅紀年誌 土中鏡

推古天皇陵傍得鏡 土馬 缶 成務天皇陵

傍得天冠闕 城州八幡美濃山穿土所得錢 豐

後宇佐邊穿土處得鉾 織遺

一 古圖類從

高島千春著

文政五年冬成島司直漢字序歷代弘賢假名次叙

此編「調度部文書具類」古圖中より抄出し其

名國子考案を附す其舉る處に画図は

筆 硯 同箱 筆硯台 墨 計算 水滸 刀

子 錐小刀 鉄 文房四寶 料紙 文書 表

紙 軸 寸快籤 注未軸 文書袋 文書筒

書笥 笈 韓櫃 文机 文台 書棚 文車

夾竿 印 以上

古今圖書集成



一 尚古因錄

初二冊

橫山由清編輯

明治二年秋月種樹福羽美辭二序金井之恭木村

正辭松園道人等附記後叙

此編各好古家子秘藏寸石古物之影厚之考案

之付記寸舉之處之品目は如左蓋し東京人而已

あり

古鈴 四 約火 古鉄刀 三 古鉄鉾 東原村主安磨

尺牘案 右京戸籍断簡 足利義持画義照覽 秀吉

中籠 古乍七類 新田義貞畫翰 土佐行光画

古銅鉾 古鏡 後鳥羽院宸翰 後兼坊直源書

尊氏陶版 大般若經 大永抄本論語集解 石

鈕 古鐔 三 管石 曲玉 鳥首太刀金具 大和國

葛下郡田蓍 永延二年 舟尾 貝多羅系 古佛像

三 古銅符 古鏡 信實朝臣筆哥仙像 壺

胡籙 二 具注曆 嘉元 後伏見院宸翰 地獄画 中鐘

燭 古尺 四 威料 以上 初編 力二 篇目 次 如左

文館詞林 三種 後嵯峨帝宸翰 日本古銅印 七

大般若經跋 天和銅 五年 柱生寺古硯 寂蓮法師真

蹟 寂蓮筆病草紙 光 張 後白河帝宸翰 法華經 勸



芥子 宣房 卿筆法華經 古鈴 四古鏡 古鈴鏡

鉄 収 鑄 像 石 釵 二 勾 玉 一 土 偶 人 二 古 瓦 器

勾 玉 十 四 石 笛 石 刀 石 製 佩 具 石 鐮 古 鏡

葛 西 清 尊 夫 婦 像 同 处 傳 喉 輪 恭 時 奉 納 太 刀

實 朝 正 行 真 蹟 短 冊 法 隆 寺 处 藏 天 平 字 号 八

歳 就 物 帳 古 料 十 三 種 古 兵 後 案 抄 横 山 由 清 識

尚 古 樓 藏 板 一 冊

一 新 撰 畫 鑑 一 冊

從 四 位 細 川 潤 次 郎 福 羽 美 辭 二 西 序 一 此 編 八 明 治 十 五 年 繪 画 共 進 會 子 付 古 來 の 名 画

を 考 究 室 子 集 め ら れ し 諸 家 の 藏 物 の 中 よ り 殊

史 子 上 下 不 亦 一 一 刻 せ ら ぬ 处 な り 初 め 子 引

用 書 三 十 五 部 を 萃 く 小 野 道 風 像 市 物 画 法 橋 鉦 春

隨 春 日 権 規 記 市 物 隆 謙 画 司 基 忠 冬 年 外 四 人 山

水 屏 風 東 基 光 画 十 界 罔 身 迹 替 魁 心 僧 部 高 源 氏

畫 卷 往 川 義 禮 伊 房 信 貴 山 縁 起 寔 勝 画 山 詞 菽 蓮 獸

戲 畫 卷 高 融 画 詩 後 鳥 羽 天 皇 辰 翰 歌 心 信 画 小 佛 像

青 木 信 直 藏 画 十 二 天 畫 像 屏 風 鍊 時 勝 笑 画 平 治 物

語 本 多 忠 恩 画 宗 隆 詞 西 行 紀 往 画 川 義 隆 詞 羽 泉 采

花 物 語 蜂 須 賀 笑 詞 後 京 氏



一 日本國見在書目錄

写

一巻

正五位下陸奥守安原佐世奉勅撰

此書簽題には外典書籍目錄と記し室生寺子傳

来の外世上は絶へたる目錄也種類を四十子分

つ

一場家卅三書百七十七本二尚書家六書五十一

本の下さ欠く本書は百七十七卷七部三詩家全欠四

禮家首を欠四十四書五樂家卅三書二百七本六春

秋家卅六書三百七十本七孝經家十九書四十五

本八論語家卅五書二百六十九本九異說家十小

學家十一正史家十二雜史家十三古史家十四霸

史家十五起居注家十六舊唐家十七職官家十八

儀注家十九刑法家廿雜傳家廿一士佐家廿二譜

系家廿三簿錄家廿四儒家廿五道家廿六法家廿

七名家廿八墨家廿九從橫家卅雜家卅一農家卅

二小説家卅三兵家卅四天文家卅五曆數家卅六

五行家卅七選方家卅八楚辭家卅九別集家四十

惣集家也合計本數一萬二千三百六十八冊

一 日本書籍惣目録 写 一冊

撰者詳かなりす



古書保存會

此書群書類從に収む仁和寺書籍目録と相違  
ひ編中の書散失して今傳ふは少し部門冊数を  
爰に挙ぐ

神事 八部 帝紀 四十三部 公事 卅三部

政要 卅一部 格 八部 式 四十五部

氏族 九部 地理 五部 類聚 八部

字類 十一部 詩家 六十一部 雜抄 八部

和歌 勅撰以下有月録七十部有之見懷中抄之乃

和漢 五部 菅結 廿二部 送書 十部

陰陽 十部 人傳 四十八部 官位 廿九部

雜々 十五部 雜抄 廿七部 從名 五十四部

以仁和寺宮書之善所院被尋之時注文云々

此抄入道大納言実冬卿家之所借賜之本也

永仁二年八月四日 師名判

一 諸家名記目録 写 一冊

撰者知らず

此編日紀類七十二部之標題且撰者を載す

此抄入道大納言実冬卿家之所借賜之本也

永仁二年八月四日写之 師名判

古書保存會



追加記録有藏官絃等書二百十七部、撰者并  
冊数を挙げ和奇類八十二部同雜類二百四部此  
多諸書記録百四部、此年詳何年公事類三十部  
識者冊数を官位補任と類三十部は標題不也を  
記す

一 諸記年月考

写

三冊

大串平五郎元書著

此書八五十九代宇多天皇より百六代後奈良天  
皇まで諸家の記録と年月を引合せし書也、此挙げ  
此の書目には今傳はらざる記あり

一 足利学藏書目録

写

一冊

新樂定編

此編藏書いまた多からず故に儒佛和医の四門  
に分つ古書寄附の年月姓年記等ありものは  
載す、寛政九年九月に元例次に足利学  
校来由略寛長九年八月五日并佳持世譜略あり  
慶長板の孔氏家語六韜三畧貞観政要東鑑寺ハ  
徳川家康公之御寄附上杉右京亮憲忠寄附ハ  
周易注疏を始め少く同憲実寄附も礼記正義  
春秋左傳注疏毛詩注疏ありて各宋版也、糸氏



政寄附子也文選五臣注珍書子は論語義疏麈尾  
好を始ゆ采元板不才厚本子は長享元龜永祿比  
多し上杉五郎憲房寄進後漢書は正統の刻本也  
朝鮮板也反多し送書子ハ近寄類要診家要訣二  
部也卷末子書画畧玩の一部を附す

一 史籍年表

一冊

伴信友編輯

弘化乙巳其大學頭林鏡市兼信友自叙

此編際例子云神代より光孝天皇子至り唯有六  
國史及編年之書而已如雜載之書甚少故毎格頭

掲御謚而下表書目不繫以年序

宇多天皇以降多雜載及家業之書故母格頭標年  
紀而下表書目御記及諸家日記有所闕供者書目

下分注所存某月若九記下注春四五城閏七九十

一是也如世所闕供則不注其未詳者書目下加圈

若延喜御記下是也

此編下子以年序奉書目上子は其書目の撰者を

載たり也雖然冊数は不注其書目九百二十八部を

載元和二年子了卷尾子年代記類五十部系傳類

三十四部類一類七十五部符宣類六部補任類百



部を別子書目甲巳を記載す又遺漏追加を分注  
子せり兼文況る処と異同甚多し雖も記録の類  
は全本少く漏漏つねる、故に爰に其説は略し  
ぬ  
一 輜軒書目 一冊  
則此編ハ輜軒并安正謙之藏書目錄也  
并安氏藏書總目五十三部一百九十七冊ハ大意  
を概書し記す物し外國書籍ハ止ふり附図跋九  
目あり  
一 記録年表 一冊

記者知らず

此編は寛平元年より享保三年までの年表ありし  
て其書目は史籍年表の多きに不及と雖もまた  
珍書まゝありお湯殿の上の日記を慶長三年と  
正保元年正月と計り載せたるは其比見らる事の  
難きにふるふる又し本朝世記ハ全部を挙げ大  
日本史は除きて其原書に拠りて載す公卿衆の手  
子成し書と見ゆ  
一 筆道要文 一冊

大乗院宮二品尊圓親王撰



此書ハ依勅詔被書進禁裡ニ御本也  
御手習之間可得御意條々

一筆ヲ取事

一御手本一段ニ御習有ヘキ事

一筆ツカヒノ肝要タル丁

一古蹟ノ筆ツカヒノ丁

一離邪僻可專正直ニ姿丁

一異様ノ丁ヲ好ムヘカウサル丁

一真草行ノ字ノ丁

一御手本用捨ノ丁

一御筆ノ丁

一御墨ノ丁

一御誓古ノ時分ノ事

一能書可被用之事

右條々初心御時御誓古註用也此外御習字莫於

有御不審者申入矣又色紙額等事迄而可申上度

此一冊道之大事也口傳之度玉ヒリククク向ヒ

御誓古可為專用事ニテクククク

文和元年十一月十五日記ニ是則

主上御手跡為御誓古也每度可申入後行房朝臣



閑口傳等亦手習之所要也篇目更子不可有外見書也

延文四年九月廿五日

一 弘法大師執筆使筆法 寫 一冊

弘法大師撰

此篇最初置筆於大指中節之條東海徐公琦曰云

一 注アリ使筆法一大指撇一、條道芳口訣及

說文等ノ注珠ニ多ク就中口訣ノ問答教ノ條奧

ニ筆、圖三箇アリ奧書ニ曰

文永十一年卯九月廿一日於金剛寺禪定院以

所筆正本軍ニ記

紙梵云ニ筆梵云 墨梵云

干時弘安九年卯九月廿八日於南都東大寺真言

院借給寫ニ畢佛子慈觀生年廿九歲或人竊申出

ニ况賢ニニ可秘藏右和州室山長先房日リ借請

奉写ニ者也

元和九年閏八月廿八日 從五位下賀茂孫主敦直

又朱書和照之跋アリ

右一卷日ニ先寄來筆法ニ書也

高祖真筆ニ写本云、尤可尊ニ即時、雖可加俵



點字之草而刀刀毫釐之差別烏焉與魯、是非几  
見雖側之辭而一旦日爾來每逢公請再三不得已  
古人之草書勘之多端其相似者以草字翻真字而  
書字以雖加和點猶未知其可否至有過筆道之達  
者請改之矣

元和二年十月初日 金剛生法子恭畏和內

關 采女殿 吟案右

此書所々前段朱書及墨點私案加之

一 老葉集 一册

種玉庵宗祇集

卷首 春連哥

露よしも石花の面かけ

春たつと思へは山も色みえし

跋ニ云愚分詠草ニ萱草老葉とし集遺物二冊あり

リ其中を抄而又二年三年之瓦礫の中を少々加

書而此一帖とすしかあれと老木の朽葉色なる

へしも待らぬは本の名を改すして老葉といふ

者也 宗 祇

大永二年九月日

一 大原野連哥集 一册



古書保存會

卷端元龜二年未春下浣謙齋策彦周良漢字叙

此書ハ元龜二年二月五日洛西大原野ニ於テ興

行々奇人聖護院道増進在三条西大納言公條卿

同中將細中菘孝里村紹巴唱叱玄哉心前等故人

之

けふふそは花咲ぬ初由おしほ山 白

あまけりし吹灰の雪 菘孝

はるの水みたまる月子雨はれし 大納言

一 医略抄 一册

雅樂頭丹波雅忠著

此書ハ昔唐医書三十四部中ヨリシテ單據ノ方

ヲ集メ急病ヲ治スル為ニ撰ム其方悉ク奇驗ノ

方ニシテ所引ノ書多クハ今ニ傳ラサル書ニシ

テ古方ヲ講スルノ人必讀ノ書ナリ

按ニ雅忠ハ丹波宿祿康頼四代侍從重明ノ子典

藥頭從四位下忠明ノ子也正四位下左京内位兼

典藥頭ニ叙任ス延久年間ノ人ナリ

一 櫟窓類鈔 写 八十册

多紀棟窓著

此書ハ儒書ノ中ヨリ送ニアツカリタルヲ摘

古書保存會



古し類ヲ以テ纂輯シタルモノ也。送ノ政令ヲ始  
メトシテ證治方藥ノ下ハ云ニ及ハス。書目送傳  
兼・詩文ノ類迄モ悉ク採入セスト云下ナレ又  
博覽比少キ編ナリ

一 算法改書

四冊

武田無量齋著

文政乙酉八月高貞覺叙 福田義貞跋

此編ハ彼夫子ノ遺書ヲ得広ク天下ノ算書ヲ涉  
編シ以テ算法改書十策ヲ編セリ

一 算法新書

五冊

千葉雄七胤秀著 長谷川善左郎門寛

文政庚寅七月初田太義山口坂山東萩亮菊地成  
裕四序

此書ハ諸般ノ名義ヨリ八算見一相傳割差分盈  
納求積開平方開立方句股弦容術天元點贏交商  
整故逐素成數互約逐約并自約増約損約零約剩  
一納一翦管通盡數招差埒術綴術四理角術及雜  
題ニ至テハ術毎ニ起源ヲ明ニシ卷末ニ極形術  
ヲ附録ス卷中末卷ニ新術數條ヲ擧ケ古人ノ解  
シ難キヲ解シ都テ算家帳中ノ秘ヲ詳ニ載ル四



方ノ算士此書ニ因テ術路ヲ求メハ無用ノ工夫  
ヲ費ス莫クノ解義捷徑ニシテ精術ヲ得易カラ  
シム

一 土佐國古城主考 写 一冊

撰者知ラス

老首ニハ此國上古波多土佐兩國ニ分レテ各國  
造アリシ后波多ヲ土佐ニ合シテ之ヲ郡トセシ  
從五位伊与守高安王養老三三年阿讃土三州ヲ管  
治セシ以來慶長五年徳川氏長曾我部盛親ノ封  
ヲ削ル迄此國ノ沿革ヲ概略記シ夫ヨリ七郡面

(第壹號)

七十七古城主ノ姓名及ヒ地名等ヲ委シテ書セ  
リ当國中世ハ細川氏ヨリ一條房家房基康政内  
政五代七准國主アリ委ク長曾我部氏之ヲ斃シ  
四國ヲ併ス天正十三年豊臣氏南証シ土佐一國  
ヲ元規ニ与テ始末ヲ分明ニセリ

一 武学拾粹 八冊

星野蔭常富撰  
嘉永三年季夏林大学頭健英佐友一舟坦兩序  
藻海河田興之俊叙本誌ニ岸ル処ハ

卷一 士操篇 卷二 士操篇 卷三 要畧

古書集存會



篇 卷四 帶甲篇 卷五 陣營篇 卷六

成功篇 卷七 探候篇 卷八 用馬篇 附

録 圖

以上每條下ニ古書ヲ抄出シテ其心得ヲ詳ニス  
且戰場ニ於テノ心掛ヲ專ニセリ嘉永六年十二  
月梓行

一 集古圖

写

二十四冊

叔藏友原貞幹著

此編本書廿二卷附録上下合廿四卷夕リ梓ル処  
ハ我朝古物ノ劔類石類玉類土類鏡ヲ始メトシ

(第壹號)

テ文書 図画類ヲ始メトシテ有職ノ心得或ハ裂  
類等ニ至ル迄網羅ス好古日録小録等ニ遺漏ス  
ル処夕リ

一 好古餘録

二冊

山崎美成著

皇朝古昔ハ經傳律令ノ字皆隋唐ニ從ヒ玉ヒシ  
トヲ始メ學校ノ典禮訓矣ノ沿革國角筆ノ國平徽  
名充カテ和字ノ説漢文和文俗文ノ考且ソ詩歌  
ノ紀原整板活版ノ一考ヲ考証セリ

一 題跋備考

写

二冊



榊庵宗原信光撰

卷端漢字ノ自序アリ

此書ハ山城國葛野郡柵尾山高山寺所藏荆祖明

憲上人遺書顯密二教西藏中書冊ノ題跋を影写

シ其人ノ傳記ヲ附ス編中兼久七將敗師ノ後妻

妾ヲ記スル條ニ尼戒光ハ中納言宗行卿ノ室ト

スルハ誤レリ禪惠尼則宗リ卿ノ室家タリ又沙

門玄證ハ未詳世出ト書ス蓋シ玄證ハ函ヲ能シ

勸修寺血脉ニ詳ナリ

一 證語須知

二冊

芝野蔭九醉菴屋主人解

卷端琴屋主人序

此編ハ證語中ノ解ニ難キ文義ノ多ク煩シキ

ヲ簡短ニ解キ一番コトニ高砂ハ何ニヨリテ作

ルイカナル度ヨリ題スト其出処ヲ面番トモニ

詳ニス享和三年刻成

一 製葛錄

一冊

大倉永常著

文政子七月簡堂羽倉天則序

葛ハ作物ノ外ニ有益ノ物ニシテ葉ハ牛馬ノ飼















